

smile at vs. anlächeln

—— 不変化詞動詞の対照研究(1) ——¹

大 矢 俊 明

1. 問題提起

ゲルマン語は不変化詞動詞 (particle verb)²を豊富に持つが、あるゲルマン語における不変化詞動詞が他のゲルマン語においても不変化詞動詞に対応するとは限らない。例えばドイツ語やオランダ語では、「彼が女の子に微笑みかけた」という出来事を *Er lächelte das Mädchen an./Hij lachte het meisje toe.* のように *anlächeln* ‘at-smile’ ならびに *toelachen* ‘to-laugh’ という不変化詞動詞を用いて表現するが、英語では *He smiled at the girl.* のように「自動詞＋前置詞句」という構造を用いて表現する。この相違は、ドイツ語やオランダ語では本来的には前置詞 *an* ないし *toe* の目的語である「女の子」が不変化詞動詞 *anlächeln* ないし *toelachen* の直接目的語に継承されるのに対して、英語ではそれが不可能であるという点に集約される。

本稿では、ドイツ語ないしオランダ語と英語の不変化詞動詞にみられるこの相違について考察する。まず、2 節でこの問題を扱っている Blom (2005) を概観し、その問題点を指摘する。3 節では不変化詞の統語構造を議論している Zeller (2001a, b) をもとに、ドイツ語と英語の相違について議論する。続く 4 節では、さらに北欧語について若干の考察を加える。5 節では、それまでの一般化に対する例外について論じ、6 節は本稿のまとめである。

¹ 本稿は、平成18年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「述語合成に関する記述的・理論的研究」ならびに同基盤研究(B)「助動詞の体系が言語に及ぼす影響に関する理論的・実証的総合研究」の助成を受けている。

² 本稿で扱う不変化詞動詞とは、ドイツ語およびオランダ語ではおもに分離動詞のことであり、また英語では不変化詞がアクセントを持ち、他動詞の場合、(i)のように不変化詞が目的語の前後に生起する動詞のことである。

(i) *He threw {up} the ball {up}.*

2. Blom (2005) の検討

オランダ語の不変化動詞を共時的・通時的に扱っている Blom (2005) では、不変化動詞は大きく次の四種類に分類されている。

- | | |
|-----------------------------|--|
| (2) A. RESULTATIVE PARTICLE | de schoenen inlopen 'wear in the shoes' |
| | de bal opgooien 'throw the ball up' |
| | het glas omgooien 'knock down/over the glass' |
| B. MODIFYING PARTICLE | de groenten voorkoken |
| | 'cook the vegetables beforehand' |
| | het lied meezingen 'sing the song with others' |
| C. RELATOR PARTICLE | |
| 1. ORIENTING PARTICLE | de jongen aankijken 'look at the boy' |
| 2. PATH PARTICLE | de sonate doorspelen 'play through the sonata' |
| D. CONTINUATIVE PARTICLE | uren doorlopen 'continue walking for hours' |
| | doorwerken 'continue working' |

A の RESULTATIVE PARTICLE は直接目的語の位置に生起している名詞句について叙述を行うものであり、いわゆる結果構文と同様の意味構造を持つ。B の MODIFYING PARTICLE は、ある出来事と他の出来事を時間的に関係づける働きを持つ。例えば *de groenten voorkoken* 'cook the vegetables beforehand' とは、「ある別の出来事が起こる以前に、野菜を料理しておく」という意味であり、また *het lied meezingen* 'sing the song with others' とは、「他の人が当該の歌を歌うという出来事と同時にその歌を歌う」という意味であり、動詞が記述する出来事と他の出来事が不変化詞によって時間的に関係づけられている。また、C の RELATOR PARTICLE はさらに二つに区別される。まず ORIENTING PARTICLE は、ある出来事が向かう対象を導入し、その対象は不変化動詞の直接目的語としてコード化される。例えば *de jongen aankijken* 'look at the boy' では、*kijken* 'have a look' という出来事が向かう対象を不変化動詞 *aan* が導入し、その対象である *de jongen* 'the boy' は不変化動詞 *aankijken* の直接目的語になる。本稿で扱う不変化詞はこのタイプである。また PATH PARTICLE は、ある参加者が通過する（比喩的な）経路（path）を導入し、その経路は不変化動詞の直接目的語としてコード化される。例えば、*de sonate*

doorspelen ‘play through the sonata’ であれば、「演奏者」が「ソナタ」という経路を通過することになり、その結果、「ソナタを最後まで演奏する」という意味になる。³ ORIENTING PARTICLE ならびに PATH PARTICLE が生起する不変化詞動詞においては、動詞で記述される出来事が向かう対象、ないし参加者が通過する経路を不変化詞それ自身が導入し、不変化詞動詞は必ず他動詞になる。また D の CONTINUATIVE PARTICLE は、動詞が記述する出来事が継続することを示し、不変化詞動詞は自動詞になる。⁴

Blom が示したこの分類は意義深いものであり、不変化詞動詞に関する対照研究に対しても有効な基盤を提供する。(3)に示すように、ドイツ語も A から D の不変化詞動詞を豊富に持つが、英語は(4)に示すように B の MODIFYING PARTICLE、ならびに C 1 の ORIENTING PARTICLE を欠いている。

(3) German:

- | | |
|-------------------------|--|
| A. RESULTATIVE PARTICLE | die Schuhe einlaufen ‘wear in the shoes’
den Ball aufwerfen ‘throw the ball up’
das Glas umwerfen ‘knock down/over the glass’ |
| B. MODIFYING PARTICLE | das Gemüse vorkochen
‘cook the vegetables beforehand’
das Lied mitsingen ‘sing the song with others’
die Rechenaufgabe nachrechnen ‘work out the arithmetical problem once again’ |
| C. RELATOR PARTICLE | |
| 1. ORIENTING PARTICLE | den Jungen ansehen ‘look at the boy’ |

³ Blom は PATH PARTICLE が導入する経路を通過するのは参加者であるとみなしているが、McIntyre (2004) はこのタイプの不変化詞動詞においては、参加者ではなく、出来事それ自体が経路を通過すると分析している。この分析によれば、de sonate doorspelen ‘play the sonata through’ においては、「演奏者」ではなく、「演奏する」という出来事が「ソナタ」を通過することになる。

⁴ ただし、Toivonen (2006: 187) は CONTINUATIVE PARTICLE を持つ不変化詞動詞は他動詞になることもあると指摘し、次の例をあげている。

- (i) The women hesitated for the SUV, but the SUV driver waved them on.
(ii) They spurred the horses on and charged at each other with all their strength.

2. PATH PARTICLE

die Sonate durchspielen ‘play through the sonata’

das Buch durchlesen ‘read the book through’

D. CONTINUATIVE PARTICLE

rumstieben ‘push around’, rumflicken ‘do minor repairs’, rumkritisieren ‘criticize pettily’, rumdiskutieren ‘discuss (in place of action), ruminstallieren ‘install useless programs’, rumstipulieren ‘stipulate rather than explain’, rumerklären, ‘explain away unconvincingly’, rumformulieren ‘do minor formulating’

(McIntyre 2004: 531)

(4) English:

A. RESULTATIVE PARTICLE

throw up the ball
knock down the glass

B. MODIFYING PARTICLE

*

C. RELATOR PARTICLE

1. ORIENTING PARTICLE

*

2. PATH PARTICLE⁵

think a problem through

⁵ ただし Blom (2005: 365f.) は、英語の read through など是不変化詞動詞ではないと考えている。彼女によれば、through が目的語に後置された (i) はいわゆる有界 (telic) の読みを持つものに対して、through が目的語の前に位置する (ii) はその読みに限定されない。この相違から彼女は (i) の through は不変化詞ではなく、[_{PP} the issue through] という構造を持つ後置詞であると分析し、英語は PATH PARTICLE を持たないと結論付けている。

(i) I thought the issue through {in/*for} an hour.

(ii) I thought through the issue {for/in} an hour. (McIntyre 2004: 539)

しかし Tenny (1994) の判断では、目的語の位置に関わらず think through は有界の読みを持つ。

(ii) think through a problem in an hour/*for an hour

think a problem in an hour/*for an hour through (Tenny 1994: 149)

また Olsen (1999: 132) が指摘するように、現代英語に後置詞が存在するとは考えにくいので、本稿では McIntyre (2004) に依拠し、(i) (ii) ともに think through という不変化詞動詞が用いられていると考えることにする。すると、英語は ORIENTING PARTICLE は持たないが、PATH PARTICLE は持つということになるが、この問題については、再び 5 節で取り上げる。

read the book through
 play the sonata through
 talk the problem through
 check the work over

D. CONTINUATIVE PARTICLE walk on, play on, read on
 play around/along

Blom (2005 : 366) は、英語における不変化詞動詞の特性として、“[t]here appear to be no relator particles in English, that is, no particles that license a Ground participant.” と指摘している。ここでの GROUND とは、認知的に際立つ対象である FIGURE に対立する意味的概念であり、FIGURE のいわゆる参照点 (reference point) になる。例えば(5)の前置詞の意味上の主語 the book が FIGURE であり、前置詞の目的語 the desk が GROUND である。よく知られているように、前置詞の目的語、すなわち GROUND の抑制は不変化詞動詞形成のひとつの契機になる。例えば(6)における前置詞の目的語である the player や der Kopf ‘the head’ が文脈や慣習から明らかであるという理由から抑制され、いわゆる存在量化詞による束縛を受けると不変化詞動詞 put on ならびに aufsetzen ‘on-put’ が形成される。

(5) the book on the desk

[FIGURE] [GROUND]

(6) a. He put the record on (the player).

b. Er setzt den Hut auf (den Kopf).

He sets the hat on the head

(Stiebels 1996: 10)

英語には RELATOR PARTICLE がないという Blom の指摘は、英語においては、GROUND に対応する参加者が不変化詞動詞の項として認可されることはない、ということである。これに対して(7a)におけるオランダ語の aankijken ‘at-look’ では、前置詞 aan の意味上の目的語である GROUND が不変化詞動詞の直接目的語として生起している。Blom (2005 : 135) は、ORIENTING PARTICLE を持つ(7a)の不変化詞動詞に(7b)の意味表示を付与しているが、ここから明らかにように不変化詞動詞の目的語である y は前置詞 aan の表示形である AT の目的語、すなわち GROUND に対応している。

- (7) a. Hij keek de jongen aan.

He looked the boy PRT

- b. [V (x) {AT (y)}]

Blom によれば、オランダ語において ORIENTING PARTICLE が発達しているのは、「後置詞」の存在に還元される。すなわち、(7a)の不変化詞はもともと後置詞であったが、その後置詞が隣接する動詞と複合動詞を形成するように再分析され、その結果、後置詞の目的語は再分析された複合動詞の目的語になるというわけである。この通時の変化は、概略、(8)のように示すことができる。なお、(8)の矢印 > の右側に表示されている [X] は不変化詞を示す。

- (8) [NP P]_{PP} – V > NP – [X – V]_V (Blom 2005: 369)

Blom (2005: 264) によれば、例えば中世オランダ語の *toe/to segghen* ‘say to’ は、(9a) のように用いられていた。(9a) の *desen goutsmet* ‘this goldsmith’ はもともと後置詞 *toe* の目的語であり、(9b) のような構造を持っていたが、その後、後置詞 *toe* と動詞 *segghen* がいわゆる再分析を受けることにより不変化詞動詞 *toesegghen* が形成され、後置詞の目的語であった *desen goutsmet* ‘this goldsmith’ はその不変化詞動詞の目的語に変わったという。

- (9) a. *Altehant als dese coninck deze woorde desen goutsmet toe gheseyt*

As-soon-as this king (SUBJ) these words (OBJ) this goldsmith (OBJ) to said
hadde had

- b. *Altehant als dese coninck deze woorde [desen goutsmet toe]_{PP}
gheseyt hadde*

さて、ドイツ語における *zu* も (10a) のように後置詞として用いられるため、⁶ (10b) の *zulächeln* ‘to-smile’ に対しては Blom の提案する後置詞分析を適用できるかも知れない。

⁶ しかし、正確には (10a) における *zu* は後置詞ではなく、いわゆる *circumposition* を形成していると分析すべきである。

- (10) a. auf den Wald *zu* / dem Wald *zu*
 onto the forest-ACC to / the forest-DAT to
 b. Ich lächelte dem Mädchen *zu*.
 I smiled the girl-DAT to

また、現代オランダ語には(11)のような後置詞と呼べる範疇が存在しており、したがって現代オランダ語から Blom の分析に対して論拠を提示することは可能であるかも知れない。しかし、(11)に対応するドイツ語(12)は許されないことに注意したい。

- (11) de ruimte in 'into the room', de heuvel op 'onto the hill', het meer over 'over the sea', de trein uit 'out of the train' (Abraham 2005: 341)
- (12) *den Raum in 'into the room, *den Hügel auf 'onto the hill', *den See über 'over the sea', *dem Zug aus 'out of the train'

さらに、オランダ語の *toe* と同様に ORIENTING PARTICLE として用いられるドイツ語の *an* が後置詞として用いられる場合、(13) のように空間的ないし時間的出発点を示す用法に限られ、*an* が移動の方向を示す後置詞として生産的に用いられるとは考えにくい。(14) に示すように、ドイツ語では *an* はかなり生産的な ORIENTING PARTICLE であることを考えると、ORIENTING PARTICLE はもともと後置詞であるという分析はドイツ語には妥当しにくいと言わざるを得ない。

- (13) a. von Rom *an* 'from Rom'
b. von Montag *an* 'from monday'
- (14) anbellen 'bark at', anblicken 'look at', anblinzeln 'blink/wink at', anfauchen 'hiss at', anhusten 'cough over', anlaufen 'call at', anlügen 'lie to', anmotzen 'whinge to', anquatschen 'speak to', anschreien 'scream at', anschweigen 'be silent to', anstarren 'stare at', anstaunen 'gaze in wonder at', anstrahlen 'shine on', anzweifeln 'doubt' (Stiebels 1996: 162f.)

加えて、Zeller (2001b: 513f.) が指摘するように、ドイツ語では本来は与格

を支配する前置詞の目的語が、不変化詞動詞の目的語に継承された場合、与格を失って対格を持つことがある。例えば(15a)の *die Flasche* ‘the bottle’ は前置詞 *aus* ‘out of’ の目的語であるため与格を持つが、この目的語が(15b)の不変化詞動詞 *austrinken* ‘out-drink’ の目的語に継承されると、対格を持たなければならない。

(15) a. *Peter hat sein Bier aus der Flasche getrunken.*

Peter has his beer-ACC out-of the bottle-DAT drunk

b. *Peter hat die Flasche/*der Flasche ausgetrunken.*

Peter has the bottle-ACC/the bottle-DAT out-drunk

多くの不変化詞動詞においては、前置詞の意味上の目的語、すなわち GROUND が抑制されるが、(15b)においては前置詞の意味上の主語、すなわち FIGURE が抑制され、その代わりに GROUND が不変化詞動詞の目的語となっている。この現象は、伝統的に *Objektvertauschung* ‘exchange of object’ と呼ばれているが、McIntyre (2001: 275) は新たに *landmark flexibility* と名付け、(16)のようなドイツ語の例をあげている。ここでも前置詞の意味上の目的語が不変化詞動詞の目的語に継承されているが、(12)でもみたようにドイツ語の *in*、ならびに(16b–d)の *ein-*は後置詞としての用法を持たないのだから、これらの動詞における *landmark flexibility* を説明する際に後置詞分析を適用することはできないことになる。

(16) a. *das Bett abziehen*

ベットのシーツをとる

the bed-ACC off-pull

cf. *den Bettbezug abziehen*

(ベッドから) 布団カバーをとる

the quilt-cover-ACC off-pull

b. *die Tasse einschenken*

カップに (液体を) 注ぐ

the cup-ACC into-pour

cf. *Tee einschenken*

お茶を注ぐ

tea-ACC into-pour

c. *die Nadel einfädeln*

針に (糸を) 通す

the needle-ACC into-thread

cf. *den Faden einfädeln*

糸を (針に) 通す

the thread-ACC into-thread

d. die Wohnung einräumen (家具を入れて) 部屋を整える

the apartment-ACC into-put

cf. Möbel ins Zimmer einräumen 家具を部屋に入れる

furniture-ACC into-the room into-put

e. eine Bank ausrauben 銀行強盗をはたらく

a bank-ACC from-steal

cf. Geld aus der Bank rauben 銀行からお金を盗む

money-ACC from the bank steal

(McIntyre 2001: 276f.)

結局、ドイツ語における ORIENTING PARTICLE に対して Blom の提案した後置詞分析は適用しにくく、(15)にみられる格の交替、ならびに(16)の現象も扱える分析が必要になる。⁷ 次節では、不変化詞の統語構造について論じている Zeller (2001a) をもとに、英語と異なり、ドイツ語およびオランダ語では ORIENTING PARTICLE が発達している理由を考察する。

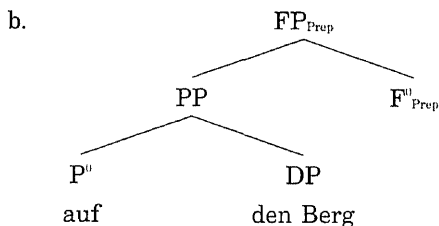
3. ORIENTING PARTICLE に関するドイツ語と英語の相違

3. 1 不変化詞の統語構造

Zeller (2001a) は、van Riemsdijk (1990) にならい、ドイツ語の前置詞句(17a)に(17b)の構造を想定している。

(17) a. auf den Berg

onto the mountain-ACC



⁷ McIntyre (2002: 117, fn. 2) は、landmark flexibility は英語にもみられるが、ドイツ語の方が生産的であると指摘している。この点については、さらに 5 節で触れる。

(17b)では、前置詞句 PP は機能範疇 F^0_{Prep} によって選択されているという点が重要である。すなわち、(17a)は前置詞句のみから形成されているのではなく、ここには見えない主要部 F^0_{Prep} も存在する。さらに Zeller は、この機能範疇は語彙的に実現することもあるとみなし、(18a)の *hinauf* は F^0_{Prep} の実現形であると分析する。すなわち、(18a)は、 $[FP [PP \text{ auf } [DP \text{ den Berg }]] \text{ hinauf }]$ という構造を持つ。また、(17b)の前置詞 P' が実現しない場合が(18b)であり、(18b)は $[FP [PP [DP \text{ den Berg }]] \text{ hinauf }]$ という構造を持つことになる。

- (18) a. *auf den Berg hinauf*
 onto the mountain-ACC up
 b. *den Berg hinauf*
 the mountain-ACC up

いずれにせよ、通常、前置詞句ないし副詞句とされている(17a)や(18)に統一的な構造(17b)が付与されるわけであるが、Zeller によれば、前置詞句と不変化詞の相違は(17b)における FP の有無にある。すなわち、不変化詞は(17b)の FP を持たない(19)の構造を持ち、この構造が動詞に付加されて不変化詞動詞が形成される。

- (19) PP
 |
 P''

(19)によれば、不変化詞は句(phrase)を構成することになる。これは、例えば英語において副詞 *right* が不変化詞を修飾できることから裏付けられる。

- (20) John threw the ball right in.

ただし、よく知られているように、副詞が不変化詞を修飾できるのは(20)のように不変化詞が目的語に後置された場合に限られている。

- (21) John threw (*right) in the ball.

(20)と(21)では、不変化詞の統語的なステータスが異なるわけであるが、Zeller (2001a) などでは(21)における不変化詞は句ではなく、主要部 (head) と分析されている。この分析によれば、(21)では[throw in]という複合的な主要部 (complex head) が構成されていることになる。⁸ また、ここでは Neeleman & Weerman (1993) や Haider (1997) などにしたがい、(20)のように不変化詞が句を構成する場合も、(21)のように不変化詞が主要部を構成する場合も、不変化詞動詞においてはいわゆる複合述語 (complex predicate) が形成されていると考えることにする。⁹

⁸ さらに、直接目的語は格照合を受ける位置に移動し、また動詞も *v* に移動するため、概略、(20)は(i)、また(21)は(ii)の構造を持つことになる。

(i) verb_i object_j t_i particle t_j

(ii) [verb+particle]_i object_j t_i t_j

⁹ この複合述語の形成により、例えば(i)のドイツ語の不変化詞動詞 *aufbrechen* 'break open' においては、*brechen* 'break' が持つ内項の意味役割と *auf* 'open' が持つ項の意味役割が併合されることになる。この場合、ひとつの項をふたつの述語が共有 (share) する。

(i) Er brach den Brief auf.

He broke the letter-ACC open

複合述語の形成については、Neeleman & van de Koot (2002) をはじめとして、結果構文を扱う際に論じられることが多い。ところで Kratzer (2005) は(ii)のようなドイツ語のデータをもとに、他動詞 (ならびに非対格動詞) から結果構文を形成できないと指摘している。

(ii) a. Er hat seine Familie magenkrank gekocht.

He has his family-ACC stomach-sick cooked

b. Er hat *(seine Familie) bekocht.

He has his family-ACC BE-cooked

c. *Er hat seine Familie magenkrank bekocht.

He has his family-ACC stomach-sick BE-cooked

自動詞 *kochen* 'cook' からは (iia) のように何も問題なく結果構文を形成するのに対し、接頭辞 *be-* が付加され、義務的に他動詞となる *bekochen* 'BE-cook' からは (iic) のように結果構文を作れない。(i) の不変化詞動詞 *aufbrechen* 'break open' の基礎動詞である *brechen* 'break' も *bekochen* と同様に他動詞であるため、結果構文と不変化詞動詞の重要な相違は「項の共有」にあることになる。すなわち、不変化詞動詞では項をふたつの述語で共有することができるのに対し、結果構文ではその操作が許されない。したがって他動詞 *brechen* 'break' に形容詞 *offen* 'open' を付加した結果構文 (iiaa) は、同じ *brechen* 'break' に不変化詞 *auf* 'open' を付加した不変化詞動詞 (iiib) よりも許容量が下がる。

(iii) a. ?Sie hat die Tür offengebrochen.

She has the door open-broken

b. Sie hat die Tür aufgebrochen.

She has the door open-broken

(Kratzer 2005: 190)

さて, Zellar (2001b) によれば, (17b)における前置詞 P⁰が補部の名詞句に格を付与することが可能であるのは, 機能範疇 F⁰_{prep} の存在による。それは, 動詞句の構造において, 動詞 V₀が補部の名詞句に格を付与できるのは, 機能範疇 v⁰が存在している, ないし活性であることが必要とされることと平行的である。Zellar によれば, (22b)では, 前置詞 aus ‘out of’ の意味上の目的語, すなわち GROUNDをあらわす名詞句は不変化詞から格を得ることはできないために, 格を得る位置に移動することになる。

(22) a. Peter hat sein Bier aus der Flasche getrunken. (= 15a)

Peter has his beer-ACC out-of the bottle-DAT drunk

b. Peter hat die Flasche ausgetrunken. (= 15b)

Peter has the bottle-ACC out-drunk

この分析は, (23)の ORIENTING PARTICLEを持つ不変化詞動詞についても適用できるだろう。(23)では, (22b)と同様, 前置詞 an が不変化詞へと変わることにより格付与能力を失い, もともと前置詞 an の目的語であった名詞句が格を得る位置に移動していると分析できる。¹⁰

(23) a. Er lächelt das Mädchen an.

He smiles the girl-ACC at

b. Der Hund bellt das Mädchen an.

The dog barks the girl-ACC at

¹⁰ (i)に示すように, 基礎動詞 lachen ‘laugh’ は an を主要部とする前置詞句を持つことができない。このことから, (i)と(ii)を関連づける本稿の分析は問題視されるかも知れない。

(i) *Er lacht an das Mädchen.

He laughs at the girl

(ii) Er lacht das Mädchen an.

He laughs the girl-ACC at

しかし, Grimm の Deutsches Wörterbuch における anlachen の項目には, „gegen, an einen lachen“という記述が与えられているし, また Paul の Deutsches Wörterbuch においては, 不変化詞 an に対して, 「自動詞が不変化詞 an と結合すると, 多くの場合, この an に選択される対格目的語が不変化詞動詞の目的語になる」(Eine große Anzahl von intr. Verben nehmen in der Zus. mit an einen eigentl. von diesem abhängigen Akk. zu sich.) と記述されている。これらのことから, (ii)の対格目的語は(i)の前置詞目的語に由来するという母語話者の直感が裏付けられる。

c. Er hustet mich an.

He coughs me-ACC at

それでは、英語はなぜ ORIENTING PARTICLE を持てないのであろうか。Zeller は英語については扱っていないので、次にこの問題を検討することにする。

3. 2 英語における不変化詞動詞の統語構造

英語における不変化詞動詞の統語構造に関する研究には、おおよそ 1) (24a) のような「動詞－不変化詞－直接目的語」(以下, VPrtO と省略する) の語順を持つ構造を基本とみなし, (24b) のような「動詞－直接目的語－不変化詞」(以下, VOPrt と省略する) の語順はそこから派生されたものであるという分析 (Johnson 1991, Nicole 2002 など), 2) 逆に (24b) を基本とみなし, (24a) はそこから派生された構造であるという分析 (Emonds 1985, Jackendoff 1997 など) があるといつてよいだろう。

(24) a. He looked up the word.

b. He looked the word up.

ここではドイツ語との並行性も考慮しつつ, 1) が妥当な分析であることをみる。

まず, (25) と (26) に見られる制約がある。

(25) John totaled up [the bills for the books].

a. Which books did John total up the bills for?

b. For which books did John total up the bills?

(26) John totaled [the bills for the books] up.

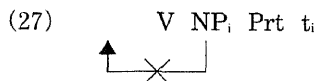
a. *Which books did John total the bills for up?

b. ?For which books did John total the bills up?

(Olsen 1997: 58)

VPrtO という語順を持つ (25) の目的語から抜き出しは可能であるが, VOPrt という語順を持つ (26) の目的語から抜き出しはできない。これは、後者においては目的語が不変化詞の後ろから移動していると想定することにより扱うこと

ができる。よく知られているように、すでに移動している名詞句はいわゆる「島」を形成するため、そこから要素をさらに移動することは許されないからである。



また Bolinger (1971 : 165) が指摘しているように、不変化詞動詞が他の動詞と並列される場合、VPrtO という語順を示さなければならない。このことは、[動詞－不変化詞] という連鎖のみが、通常の他動詞と同じ統語的単位であることを示している。

- (28) a. He signed and handed over the report.
 b. *He signed and handed the report over. (Bolinger 1971: 166)

さらに、基本語順はいわゆる旧情報を含まず、すべてが焦点である場合の語順であるとされるが、(29)に示すように、分裂文の焦点には VPrtO のみが生起できる。したがって、この語順が基本語順であるということになる。¹¹

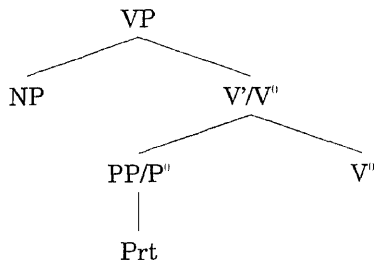
- (29) a. It was to live down his past that he was unable to do.
 b. ??It was to live his past down that...
 c. It was to stir up trouble that he intended.
 d. ??It was to stir trouble up that he intended.
 (Olsen 1997: 60)

さらに、Zeller (2001a) にしたがって、SOV タイプの言語であるドイツ語の不変化詞動詞が(30a)の構造を持つなら、SVO タイプの言語である英語はそれと鏡像関係にある(30b)の構造を持つと考えるのは自然であろう。

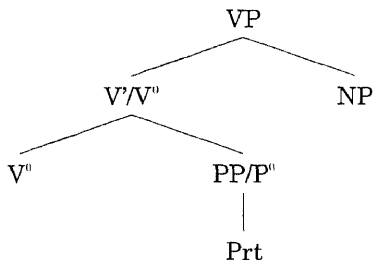
¹¹ ただし、“What happened?” という疑問文に対しては、VPrtO も VOPrt も返答となり得るようである。

- (i) What happened?
 a. They called off their engagement.
 b. They called their engagement off. (Olsen 1997: 59)

(30) a.

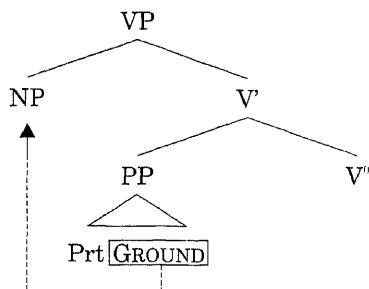


b.

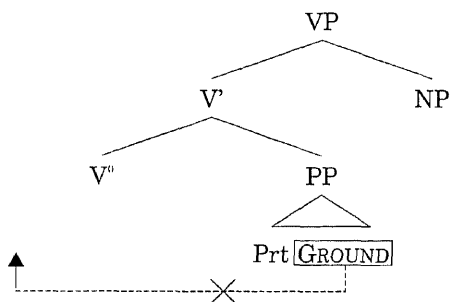


これらのことから英語における不変化詞動詞の基本語順は、VPrtO であると考えられる。これをふまえて、「笑いかける」という出来事をドイツ語やオランダ語では不変化詞動詞を用いて表現できるのに対して、英語では不可能であるという問題に戻ろう。すでに見たように、前置詞と不変化詞の相違は機能範疇 F^0_{Prep} の有無にある。後者は F^0_{Prep} を持たないため、いわゆる GROUND にあたる名詞句に格を付与することができない。その GROUND は格を求めて移動することになるが、ドイツ語やオランダ語には(31a)のように不変化詞動詞の目的語の位置が用意されている。これに対して、英語では、格を持てない GROUND が移動しても格を得る位置は用意されていない。英語における不変化詞動詞の基本語順が VPrtO であるなら、不変化詞動詞における目的語の位置は格を持たない GROUND が移動する方向とは逆の位置にあり、その GROUND は格を得ることはできないからである。

(31) a.



b.



さて、次に考えたいのは、ドイツ語やオランダ語が ORIENTING PARTICLE を持つのに対して、英語が ORIENTING PARTICLE を持てないのは、結局のところ、SOV 語順と SVO 語順の相違に基づくのではないか、という一般化の可能性である。次に英語と同様に SVO 語順を持つ北欧語について若干の考察を行い、この一般化の妥当性を検証する。

4. ノルウェー語・スウェーデン語・デンマーク語における ORIENTING PARTICLE

まず、英語と同様、(32)のように不変化詞が目的語の前後に生起するノルウェー語をみてみよう。

(32) a. Jon sparka hunden ut.

Jon kicked dog-the out

b. Jon sparka ut hunden.

Jon kicked out dog-the

(Åfarli 1985: 75)

ノルウェー語では「笑いかける」という出来事を、英語と同様、(33a)のように「自動詞＋前置詞句」という連鎖により表現する。(33b)から明らかなように、ノルウェー語における *til* ‘at’ は不変化詞としての特徴を示さず、したがってノルウェー語も ORIENTING PARTICLE を持たないことになる。

(33) a. *Han smiler til mannen.*

She smiles at man-the

b. **Han smiler mannen til.*

She smiles man-the at

次にスウェーデン語をみてみよう。スウェーデン語も SVO 言語であるが、英語やノルウェー語とは異なり、不変化詞の語順は動詞の直後に固定されている。次の(34)から明らかなように、不変化詞 *bort* ‘away’ は目的語の後ろに位置することはできない。

(34) *Peter sparkade bort bollen (*bort).*

Peter kicked away ball-the away

(Toivonen 2003: 19)

Toivonen (2003: 112ff.) は、スウェーデン語の不変化詞は、1) (34)や(35)のような出来事の結果 (resultative) をあらわすもの、および2) (36)のようなアスペクトをあらわすものに限定されている、と指摘する。この記述に基づく、スウェーデン語にも ORIENTING PARTICLE はないということになる。つまり、(37)における *åt* ‘at’ は不変化詞ではなく、それ自身は強勢を持たない前置詞である。

(35) *Han lade ner boken.*

He laid down book-the

(Toivonen 2003: 112)

(36) *Mannen pratade på.*

Man-the talked on

(Toivonen 2003: 137)

(37) *Han skrattade åt henne.*

He laughed at her

さらにデンマーク語をみよう。デンマーク語における不変化詞の位置は、ノルウェー語ならびにスウェーデン語と異なり、目的語の後ろに固定されている。

- (38) a. Boris skruede {*ned} musikken {ned}.

Boris screwed down music-the down

‘Boris turned the music down.’

- b. Boris skrev {*under} kontrakten {under}.

Boris wrote under contract-the under

‘Boris signed the contract.’

(Svenonius 1996)

このような語順を持つデンマーク語も ORIENTING PARTICLE を持たず、「笑いかける」という出来事は「自動詞＋前置詞句」という構造によって表現する。

- (39) a. Han ler/smiler til barnet.

He laughs/smiles at child-the

- b. *Han ler/smiler barnet til.

これらのことから、英語に限らず、SVO 語順を持つゲルマン語は ORIENTING PARTICLE を持たないことになる。この点は、ノルウェー語・スウェーデン語・デンマーク語における不変化詞動詞も、英語と同様、不変化詞が動詞に隣接する(40)の構造を持つという想定から説明できる。さらに、不変化詞の位置が動詞の直後と固定されているスウェーデン語に対しては、英語の(41)のような複合的な主要部形成が義務的であり、また不変化詞の位置が目的語の直後と固定されているデンマーク語では(41)にみられる複合的な主要部形成が許されないという制約が想定できる。これらの点に対して、独立した根拠があるだろうか。

- (40) V - Prt - Obj

- (41) He [threw up] the ball.

これらの点については、Haider (1997) が指摘する使役動詞 *let* を複合述語化する際にみられる語順の制約から裏付けることができるだろう。例えばドイツ語の(42a)は「彼女は私に叫ばせた」という(42b)に対応する意味と、「彼女は(誰かに)私を呼び寄せるように仕向けた」という(42c)に対応する意味を

持つ。前者における rufen 'cry' は自動詞であり、対格を持つ mich 'me' はその意味上の主語である。これに対して、後者における rufen 'cry' は他動詞であり、対格を持つ mich 'me' はその意味上の目的語である。この場合、他動詞 rufen 'cry' の意味上の主語は抑制されており、したがってこの構造は受動的な意味を持つことになる。Haider によれば、この「使役動詞＋動詞句」という連鎖が受動的な解釈を持つことは、ここで複合述語が形成されていることに由来する。

(42) a. Sie ließ mich rufen.

She let me-ACC call

b. She let me call.

c. She let me be called.

(Haider 1997: 24)

さて、ノルウェー語における「使役動詞 la 'let' ＋動詞句」では、不定詞が目的語の後ろに位置する (43a) も、また不定詞が目的語の前に位置する (43b) も許される。この場合の不定詞の語順は、ノルウェー語における不変化詞の語順 (43c) と同じである。

(43) a. Han lot matten støvsuge.

He lets carpet-the vacuum-clean

b. Han lot støvsuge matten.

(Norwegian: Haider 1997: 26)

c. Jon sparka {ut} hunden {ut}.

Jon kicked out dog-the out

スウェーデン語における「使役動詞＋動詞句」という構造では、(44a) のような不定詞が目的語の前に位置する語順のみが許される。やはり、ここでの不定詞の語順には (44c) の不変化詞と同じ制約がある。さらにデンマーク語における「使役動詞＋動詞句」の場合、(45) に示すように、不定詞が目的語の後ろに位置する語順のみが許される。これも (45c) の不変化詞と同じ語順である。

(45) a. Han lät dammsuga mattan.

He lets vacuum-clean carpet-the

b. *Han lät mattan dammsuga.

(Swedish: Haider 1997: 12)

- c. Peter sparkade bort bollen (*bort).
 Peter kicked away ball-the away
- (45) a. Han lod tæppet støvsuge.
 He lets carpet-the vacuum-clean
- b. *Han lod støvsuge tæppet. (Danish: Haider 1997: 12)
- c. Boris skruede {*ned} musikken {ned}.
 Boris screwed down music-the down

これらのことから、ノルウェー語・スウェーデン語・デンマーク語において複合述語を形成する際には、語順に関する一定の制約が認められることになる。すなわち、複合述語形成の際、スウェーデン語では、(46a)のように「動詞＋不変化詞」ないし「使役動詞 *låta* 'let' ＋不定詞」という連鎖が義務的に移動するのに対して、デンマーク語では(46b)のように「動詞」ないし「使役動詞 *lade* 'let'」のみが義務的に移動し、不変化詞ないし不定詞は残留 (strand) しなければならない。また、英語ならびにノルウェー語はどちらも可能であることになる。また、これらの点は SVO 語順を持つゲルマン語における不変化詞動詞が一律に(46c)の構造を持つという想定と整合的である。

- (46) a. [V Prt/V]_i Obj_j [e]_i [e]_j
 b. [V_i] Obj_j [e]_i Prt/V [e]_j
 c. V - Prt - Obj

本節の議論から、1) ORIENTING PARTICLEの有無は SOV/SVO 語順の相違と相関していること、2) SVO 語順を持つゲルマン語における不変化詞の基本語順は動詞の直後であることが明らかになったであろう。さらに1)の点は、そもそも SVO 語順を持つ言語が、前置詞の意味上の目的語、すなわちいわゆる GROUND を不変化詞動詞の目的語に持てるか否かという、より一般的な問題を提起する。

5. GROUND の目的語化

前節における議論から、SVO 語順を持つ言語は ORIENTING PARTICLE を持たないのみならず、そもそもいわゆる GROUND を不変化詞動詞の目的語に持つ

ことはできないという予測が成り立つわけであるが、本節ではその点を検証する。

まず、ノルウェー語からみてみよう。ノルウェー語では、(47a)のように、前置詞の意味上の主語、すなわち FIGURE を目的語にした不変化詞動詞は許されるが、(47b)のように前置詞の意味上の目的語、すなわち GROUND を目的語にした不変化詞動詞は許されない。さらに(48)にみるように、ドイツ語では許された GROUND を目的語に持つ不変化詞動詞はノルウェー語では不変化動詞にならない。

- (47) a. Vi torket {av} stovet {av}.

we dried off dust-the off

‘We wiped off the dust.’

- b. Vi torket {av} bordet {*av}.

we dried off table-the off

‘We wiped off the table.’

(Svenonius 2003: 442)

- (48) a. Peter hat die Flasche ausgetrunken. (= 15b)

Peter has the bottle-ACC out-drunk

- b. Hun drakk {ut} glasset {*ut}.

she drank out glass-the out

‘She emptied the glass.’

(Svenonius 2003: 442)

さらに、ノルウェー語では2節で紹介した Blom (2005) が PATH PARTICLE と呼んでいる不変化詞も許されない。PATH PARTICLE は、オランダ語の(49)のように、動詞で記述される出来事、ないし参加者が通過する経路を導入するが、ノルウェー語では(50a)の前置詞 gjennom ‘through’ の目的語を、(50b)のように不変化詞動詞の目的語にすることはできない。これらのことから、ノルウェー語では GROUND を不変化詞動詞の目的語にすることはできないという一般化が得られる。

- (49) de sonate doorspelen

‘play through the sonata’

- (50) a. Han Leser gjennom boken.

She reads through book-the

- b. *Han Leser boken gjennom.

She reads book-the through

ここで問題となるのは(51)の英語の例である。英語では、ノルウェー語とは異なり、(51a,b)のように PATH PARTICLE も可能であり、また(51c)のように GROUND であると思われる table が不変化詞動詞の目的語になる。

- (51) a. She read {through} the book {through}.
 b. She thought {through} the problem {through}.
 c. We wiped {off} the table {off}.

まず、(51a,b)の PATH PARTICLE についてであるが、OEDによれば read through という不変化詞動詞は17世紀、また think through という不変化詞動詞は20世紀から用いられている。つまり、このタイプの不変化詞動詞はかなり新しいことになる。ここでは GROUND が目的語の位置に移動したのではなく、(52a)の構造が(52b)のように再分析され、不変化詞動詞 read through が形成されたと考えることにするが、その再分析の引き金は、(53a)に示すような有界 (telic) の解釈であるように思われる。すなわち、(53a)の構造が(53c)のような他の不変化詞動詞と同様に有界の解釈を持つことから、あらたに(52b)のような構造を持つように再分析されたと考えられるわけである。さらに検討する必要があることはもちろんであるが、この分析が正しいとすると、英語における PATH PARTICLE はドイツ語における(48a)の austrinken 'out-of-drink' や ORIENTING PARTICLE を持つ anlächeln 'at-smile' とは異なる原理によって形成されていることになる。

- (52) a. read [through the book]
 b. [read through] the book
 (53) a. think through a problem in an hour/*for an hour
 b. think a problem in an hour/*for an hour through (Tenny 1994: 149)
 c. look up a name in the phonebook in an hour/*for an hour
 (Tenny 1994: 148)

それでは、(51c)の wipe the table off についてはどうであろうか。嶋田(1985: 79)はその類例として(54)をあげ、GROUND が不変化詞動詞の目的語になることができるのは動詞が「きれいにする」という意味を含む場合に限られると指摘している。

- (54) a. She brushed the suit off.
 b. She cleaned the sofa off.
 c. He washed the hand off.

確かに(51c)や(54)では GROUND が不変化詞動詞の目的語として選択されているように見えるが、ここで用いられている動詞は(55)にみるように不変化詞が付加されていないくても、(51c)や(54)の場合と同じ目的語を持つことができる。したがって、(51c)や(54)において本当に目的語が交替しているかどうかは不明であると言わざるを得ない。¹² この点は、2節でみた GROUND を目的語に持つドイツ語の不変化詞動詞(56)の場合、(57)に示すように、不変化詞を削除するとその目的語を持てなくなる、あるいは意味が変わってしまうことと対照的である。

- (55) a. We wiped the table.
 b. She brushed the suit.
 c. She cleaned the sofa.
 d. He washed the hand.

- (56) a. das Bett abziehen ベットのシーツをとる
 the bed-ACC from-pull
 b. die Tasse einschenken カップに(液体を)注ぐ
 the cup-ACC into-pour
 c. die Nadel einfädeln 針に(糸を)通す
 the needle-ACC into-thread
 d. die Wohnung einräumen (家具を入れて)部屋を整える
 the apartment-ACC into-put
 e. eine Bank ausrauben 銀行強盗をはたらく
 a bank-ACC from-steal

- (57) a. das Bett ziehen → 「ベットを引く」という意味になる
 the bed-ACC pull
 b. die Tasse schenken → 「カップをプレゼントする」という意味になる
 the cup-ACC present

¹² これらの例において目的語が交替していないとすると、(54)の不変化詞 off は “completely” を意味することになる。

c. *die Nadel fädeln

the needle-ACC thread

d. die Wohnung räumen → 「住居を空にする」という意味になる

the apartment-ACC clear

e. eine Bank rauben → 「(銀行ではなく同音異義語の) ベンチを盗む」

a bench-ACC steal という意味になる

しかし, McIntyre (2004) があげている(58)の場合, (51c)や(54)と異なり, 目的語を認可しているのは不変化詞である。¹³ それは, 不変化詞を持たない基礎動詞 pour や pump は「場所」を目的語に持つことはできないことから明らかである。

(58) pour the bucket out, pump the cellar out (McIntyre 2004: 538)

(59) a. *pour the bucket (McIntyre 2003: 119)

b. *pump the cellar

したがって(58)では目的語の交替が生じており, 不変化詞動詞は GROUND を目的語に持つように見える。英語において, この現象がどれほど生産的あるかはさらに調査しなければならないが, もしそれほど生産的でないとすると, (58)はメトニミーから説明される可能性もあるように思われる。すなわち, (58)はFIGUREである「液体」を「容器」で置き換えた表現ということである。

6. まとめ

本稿では「笑いかける」という出来事が, ドイツ語やオランダ語においては

¹³ 英語における landmark flexibility の例として, さらに McIntyre (2003: 130) は(i)を, また McIntyre (2004: 538) は(ii)をあげている。

(i) pour out the bucket, fill in the form, strip off their clothes

(ii) wipe the table off, pour the bucket out, squeeze the orange out, pump the cellar out, run someone through (with a sword)

(i)の fill in the form はそもそも*fill the information in the formのように目的語を持っていないために目的語が交替しているとは言い難い。また strip off their clothes は strip the clothes off someone から形成されている可能性がある。(ii)の squeeze the orange out における squeeze はもともと「果物」を目的語に持てる他動詞であり, run someone through は PATH PARTICLE を持つ不変化詞動詞であるため, ここでは問題としない。

不変化詞動詞で表現されるのに対して英語では「自動詞＋前置詞句」という連鎖により表現される理由について考察した。この相違は、不変化詞が意味上の目的語を持つ場合、ドイツ語やオランダ語はその目的語に対格を付与しうる統語構造を持つという点に基づく。さらに、北欧語も考察の対象に加えることにより、この相違は、結局、SOV 語順と SVO 語順の相違に帰することを主張した。この「笑いかける」という出来事に対する考察は、そもそも SVO 言語においてはいわゆる GROUND を不変化詞動詞の目的語に持てないという予測をするが、英語においてはその一般化に対する若干の「例外」が存在するようである。これら例外の一部については、メトニミーが働いている可能性を指摘したが、この点についてはさらに考察する必要がある。

参考文献

- Abraham, Werner (2005) *Deutsche Syntax im Vergleich*. Tübingen: Stauffenburg.
- Áfarli, Tor A. (1985) Norwegian Verb Particle Constructions as Causative Constructions. In: *Nordic Journal of Linguistics* 8, 75–98.
- Blom, Corrien (2005) *Complex Predicates in Dutch. Synchrony and Diachrony*. Dissertation. University of Amsterdam.
- Bolinger, Dwight (1971) *The Phrasal Verb in English*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Emonds, Joseph E. (1985) *A Unified Theory of Syntactic Categories*. Dordrecht: Foris.
- Haider, Hubert (1997) Precedence among Predicates. In: *The Journal of Comparative Germanic Linguistics* 1, 3–41.
- Jackendoff, Ray (1997) Twistin' the Night away. In: *Language* 73, 534–559.
- Johnson, Kyle (1991) Object Positions. In: *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 577–636.
- Kratzer, Angelika (2005) Building Resultatives. In: Maienborn, Claudia & Wöllstein-Leisten, Angelika (eds.) *Event Arguments: Foundations and Applications*. Tübingen: Niemeyer, 177–212.
- McIntyre, Andrew (2001) German Double Particles as Preverbs. Tübingen: Stauffenburg.
- McIntyre, Andrew (2002) Idiosyncrasy in Particle Verbs. In: Dehé, Nicole, et al. (eds.) *Verb-Particle Explorations*. Berlin: de Gruyter, 95–118.
- McIntyre, Andrew (2003) Preverbs, Argument Linking and Verb Semantics: Germanic Prefixes and Particles. In: Booi, Geert & van Marle, Jaap (eds.) *Yearbook of Morphology 2003*. Dordrecht: Kluwer, 119–144.
- McIntyre, Andrew (2004) Event Paths, Conflation, Argument Structure, and VP Shells. In: *Linguistics* 42, 523–571.

- Neeleman, Ad & Weerman, Fred (1993) The Balance between Syntax and Morphology: Dutch Particles and Resultatives. In: *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 433-475.
- Neeleman, Ad & van de Koot, Hans (2002) Bare Resultatives. In: *The Journal of Comparative Germanic Linguistics* 6, 1-92.
- Nicole, Fabrice (2002) Extended VP-Shells and the Verb-Particle Construction. In: Dehé, Nicole, et al. (eds.) *Verb-Particle Explorations*. Berlin: de Gruyter, 165-190.
- Olsen, Susan (1997) Über den lexikalischen Status englischer Partikelverben. In: Löbel, Elisabeth, & Rauch, Gesa (Hrsg.) *Lexikalische Kategorien und Merkmale*. Tübingen: Niemeyer, 45-71.
- Olsen, Susan (1999) DURCH DEN PARK DURCH, ZUM BAHNHOF HIN: Komplexe Präpositionalphrasen mit einfachem direktionalem Kopf. In: Wegener, Heide (Hrsg.) *Deutsch kontrastiv*. Tübingen: Stauffenburg, 111-134.
- van Riemsdijk, Henk (1990) Functional Prepositions. In: Pinkster, Harm & Genée, Inge (eds.) *Unity in Diversity: Papers presented to Simon C. Dik on his 50th Birthday*. Dordrecht: Foris, 229-241.
- Stiebels, Barbara (1996) *Lexikalische Argumente und Adjunkte*. Berlin: Akademie Verlag.
- Svenonius, Peter (1996) The Verb-Particle Alternation in the Scandinavian Languages. Ms.
- Svenonius, Peter (2003) Limits on P: Filling in Holes vs. Falling in Holes. In: *Nordlyd* 31.2: 431-445.
- Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer.
- Toivonen, Ida (2003) Non-Projecting Words. A Case Study of Swedish Particles. Dordrecht: Kluwer.
- Toivonen, Ida (2006) On Continuative ON. In: *Studia Linguistica* 60, 181-219.
- Zeller, Jochen (2001a) Particle Verbs and Local Domain. Amsterdam: Benjamins.
- Zeller, Jochen (2001b) Lexical Particles, Semi-lexical Postpositions. In: Corver, Norbert & van Riemsdijk, Henk (eds.) *Semi-Lexical Categories*. Berlin: de Gruyter, 505-549.
- 嶋田祐司 (1985) 『句動詞』大修館書店.